

直徑一メートル半くらいの字は、二メートル四方くらいの紙に書くようにし、三字をそれぞれの形に応じて多少の大小長短をつけ、遠目では全く均整がとれているように書かねばならない。

私は美濃紙くらいのを、その比例に切つて何枚も作り一字一枚に楷書で書き、並べてみて太さ大ききの釣り合いを見さだめて、いよいよ実物大に書いてみる。書いてみると驚くことにどうも「丸」という字は画数が少ないのに曲線と斜線で、ウツカリすると小さめになりやすいので、少し誇張するとすぐ大きくなり過ぎて間が抜ける。全く厄介な字である。

戦後一時、シベリアや北滿の引揚者を運んで、敦賀港と大陸を往來していた「興安丸」などは、「興」字以外はどれも落ち着かない字で、しかも最初に複雑な画の字がくるので随分苦勞した思い出がある。

それだから進水式だとか招待をいただいても、ロープが切られてスルスルとあの胴体が海へ浮かんでも楽隊や祝砲など少しも念頭になく、眼はじつと舳の両側についている文字ばかりをおつている。そんな風で、港湾に船の出入りを見ているも、「アアあれは失敗だ。これは何とか出来ている」とか気にかかるものである。

そういう中で青函連絡の船を待つていたある日、「第一尾花丸」という小型の曳航船にわが恩師霞洞先生の筆になるものを拝見した時のうれしかったこと。ハトロン紙の全紙大に一字づつ書かれるのを傍らに待してお手伝いをし、余墨で大きく「鶯」一字を書いていただき、後年それを表装する時に、その来由を漢文数字で下へ誌した思い出のものである。アアあの船はまだ働いている、そして霞洞先生の字の気宇の雄大さを遺している——と見ていて、「尾」も「花」も「丸」も三字とも右側に上に払いあげる筆があり、もちろん楷書のことだからあまり変化をつけることもできないのに、それが少しも気にならないところなどすばらしいものだった。

戦前にこの船名に匹敵する大きい字を書いたことは何度もあるが、それはほとんどわが貞香会の新年書初会の席上揮毫で、書いているところを見せるショーのようなものであった。

ところが昭和十五年を過ぎると、太平洋戦争といった戦争の規模も拡大につぐ拡大をして、日本の武運を祈る声が山野に充ち満ちている世運を背景として、新年の書初式にも「敵国降伏」の四字を書くことになり、本州製紙という大会社から大同洋紙店を通じて大きな紙を寄贈していただいた。

折角長さ三十メートルあまりもあり幅もこれに相応している超大型、勿体ないから切つたりしないでこれに四字を雄渾に書こうと一決し、福島市の古い筆屋さんが看板のようにしていた、私の身長くらいの軸に筆草で作ったものが買ひ受けてあったのを幸いこれを使って、東京八重洲にあったクラブの大広間をおつ通しに開放して揮毫した。

「降」の字などは一字が十メートル以上もあった。これは随分話題になったが、後に東京株式取引所の所有となり、シンガポール陥落の時にはこれを百尺（約三十メートル）の軸に表装し、取引所から軍樂つきで二重橋前へ行進し、さらに靖国神社へ奉納となって現存している。

この軸の表装は専門表具店が絶対やれないというので、龍野川の方におられた画家の兼子泰秋先生が快諾せられ、生麻の平たいままのものを斜め交錯させて裏打ち下に入れ巻いた直径が一メートル以上もある軸ものに仕立てて下さった。

みんな驚いてその製作法を訊いても、呵々大笑して一片の愛国心が作らせたんですといつておられた。この作品の記事の精しくは、陥落祝賀の人手の状況を載せていた翌日の読売新聞であるが、これには中村味堂氏の書で云々とあった。現場からの記事電話で、「素」は「味の素」の素といったが「味」の方になったのに違いない。

〈「書範」、昭和五十六年九月〉

『筆間雜記』中村素堂隨筆集昭和六十三年刊より転載。